

会長の時間 ●富田会長

本日の会長の時間は、ロータリーの創立前の人物で、彼こそロータリアンと思う人物を紹介したいと思います。

それは、ボストン出身のベンジャミン・フランクリン（1706－1790）で、ご周知の通り、フランクリンは印刷業から身を起こし、政治家や外交官、物理学者などマルチに活躍した人物で、100ドル紙幣にも肖像画があり、「アメリカ合衆国建国の父」として、そして、何よりも人道家として知られている人物です。M.ウェーバーもフランクリンをプロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神を合致させた人物として高く評価しています・

有名な『フランクリン自伝』によると、フランクリンは、1727年にロータリークラブに似た“ジャントー”と称されるクラブを創り、また、1728年に「道徳的な完璧」を目標に、自ら信念を、『フランクリンの十三の徳目』と称する行動規範にまとめて実行しました。それは、例えば「節制」について、「飽きるまでたべないこと、酔うまで飲まない事」など具体的に説かれ、以下、沈黙、規律、決断、節約、勤勉、誠実、正義、中庸、清潔、平静、純潔、譲渡の十三の徳目に及びます。また、彼は、徳目を作るのみならず、奉仕の実践に於いてもアメリカ初の公立図書館を設立したり、その他多くの有意義な奉仕活動を実践しました。フランクリンは、『富に至る道』という論文の中で「富に至る道は徳に至る道」と述べ、勤勉と儉約を、富を得るための二大条件と述べていますが、これは利他を重んじるロータリーとつながるのではないかと思います。

ロータリーの創設者、ポール・ハリスは1868年に生まれ、ニューイングランドのピューリタンの風土の中で育ったので、このフランクリンの思想に影響を受けていたと推察されます。

私は、20代後半に、ボストンでMIT留学中の本條直前会長を訪ねた後、フランクリンが没したフィラデルフィアにある独立記念館を訪ねたことがあります。その時、アメリカの独立前後の様々な展示物を見て、それまでアメリカという国は、自由な国であると同時に軍事大国というイメージがありましたが、アメリカに素晴らしい『良心』があること、そして、その良心というものが、日本人の私にもすんなりと受容できることに驚き、『良心』というものは普遍的な価値観があると感じました。

ロータリーの神髄である中核的価値観が示す『良心』は、普遍的なものであり、時代や国境を越えたものであります。そして、時の変遷に伴って微調整を加えながら、自ずと進化しているものだと考えます。

ポール・ハリスによって始められたロータリーの物語は、まだ物語の途中ですが、それを変節し、語り継ぐのは我々の責務であります。そして、それは、遠くフランクリンが目指した世界とつながるのかも知れません。